

どぞうさがみ  
土蔵相模

はたご  
旅籠屋である相模屋の外壁は、白と黒の格子状の模様をしています。このような模様の壁は「なまこ壁」といい、土蔵に多く用いられていました。そのため、相模屋はその外見上の特徴から、土蔵相模と呼ばれていました。江戸時代末期の土蔵相模は、文久2年(1862)に長州藩(現在の山口県萩市周辺)の高杉晋作(たかすぎしんさく)ら外国人を排斥しようとする考えの武士が、御殿山(ごてんやま)で完成間近だったイギリス公使館を襲撃するために集まったところです。また慶応2年(1866)には生活に困窮した人々によって襲撃されるなど、歴史の舞台となりました。

2\_03\_01



土蔵相模の想定復元模型

白と黒の格子状の壁をしている建物が土蔵相模です。

2\_03\_02



想定復元 CG「品川宿」

制作：フジテレビタイムトリップビュープロジェクト（当館制作協力）  
土蔵相模の想定復元模型をもとに、海側から見た風景を再現しています。